

『分析論後書注解』におけるトマス・アクィナスの知識論(2) — *Expositio Libri Posteriorum*, lib.1, lect.2 による —

水田 英実

1. はじめに

トマス・アクィナスによる『分析論後書注解』は、ヴェネチアのヤコブによるアリストテレス『分析論後書』のラテン語訳およびメルベケによるその改訂版にもとづいて行われた未完の逐語的な注解である。第1巻26章までヤコブ版に準拠、以降、第2巻20章までメルベケ版に準拠している。執筆時期は、1269年—1272年頃とされるから、『デ・エンテ』(1252-56)や『対異教徒大全』(1259-64)と比較して、かなり遅かったことになる。しかしトマスは、この『注解』を執筆する以前に、それも早い時期に、ヤコブ訳を通して既にアリストテレスの『分析論後書』に触れることができ、確実な知識としての学的認識の成立に関するアリストテレス説にもとづいて、自らの知識論を確立させるにいたったと考えられている。「知識論に関するアリストテレスのこの著作は、トマスの体系的な著作のすべてに深い影響を与えている¹⁾」のである。

¹⁾J.A.Weisheipl, O.P. *Friar Thomas d'Aquino, His Life, Thought, and Works*. Oxford (1974), p.375.

なおワイスハイプは、(ミニオ・パルエロの指摘に負うこととして、トマスが既にメルベケによる新版をも入手していたと補足しながらも)以前から知られていたヴェネチアのヤコブの版(12世紀中頃)に準拠して『分析論後書』の注解を始めたとする。ただし、メルベケ版の成立の時期やトマスが『分析論後書』の注解に従事した時期の詳細については不明であるとし、マンドネ説(ヴィナルボ在住中の1268年頃以降、『命題論(ペリ・ヘルメニアス)注解』よりも前)およびグラープマンとヴァルトの説(二回目のパリ在住中の1269-72年)に触れ、自らは1269-72年説をとっている。

トレルも、(ゴティエに依拠して)トマスの注解は『分

析論後書』の第1巻26章までヤコブ版を用いて行いつつも、既にメルベケ版を熟読していたという見解を示している。トマスがメルベケ訳の『形而上学』を入手するのは1271年半ばであったところから、同じ時期にメルベケ訳の『分析論後書』を入手したに違いないとみて、同年10月に『命題論注解』を中断し、『分析論後書注解』を始めたとみるのは不自然でないとする。すなわち、パリ在住中の1271年の終わりにヤコブ訳を用いて『分析論後書注解』を始め、その後、ナポリにおいてメルベケ訳を用いて、第1巻27章から第2巻20章までの注解を続けたとみなす。従ってトレル説によれば、『分析論後書』の執筆時期は、1271年末-1272年末であったことになる。中断していた『命題論注解』もナポリに携行しているけれども、トマスは1274年に病没する。そのため、『命題論注解』も『分析論後書注解』も、『神学大全』やその他の多くの『注解』と同様、未完に終わる。トマスの死後、1275年には二つの『注解』は、所望されていずれもパリ大学に送られている。

ところで、12世紀後半にアリストテレスの著作のラテン語訳がすすみ、論理学書以外の書物が翻訳されると、早くも1210年には自然学関係の書物に対して禁令が出されている。それにもかかわらず13世紀後半のパリ大学において、シゲルスを始めとしていわゆるラテン・アヴェロエス主義者たちが台頭し、極端なアリストテレス主義を提唱するにいたる。パリ司教エティエンヌ・タンピエによるアリストテレス禁令が出されるのは1270年である。トマスはこのような時期に一旦辞していたパリ大学に戻って再び教鞭をとり、独自の仕方でも、次々とアリストテレスの著作の注解を書く一方、『知性の単一性—アヴェロエス主義者たちに対する論駁』(1270)を著して極端なアリストテレス主義を斥けている。タンピエは1277年にさらに厳しい二回目の禁令を出している。しかしそれは最初の禁令が必ずしも功を奏さなかったからでもあった。もっともこの時期を通じて論理学書が断罪の対象となることはなかった。

『分析論後書』の冒頭の一節において提唱した、確実な知識としての学的認識の成立に先立って何らかの認識が存在しているということをめぐって、詳細な考察がなされているのを見た²。

『分析論後書注解』第一講は、『分析論後書』第一巻第一章の最初の箇所(71a1-a10)に対応している。この箇所ではアリストテレスは、「知性による認識の場合、すべての教えとすべての学びは、先在する認識から生じている(71a1. ヤコブ訳参照)」ということ、すなわち帰納法を用いて、「すべての場合を考察してみれば、このことは明らかである(71a2. ヤコブ訳参照)」という仕方論じている。

トマスによれば、この箇所ではアリストテレスは、要するに、われわれの有する認識はすべて何らかの認識の先在にもとづいているという、一般的なことを言おうとしたのである。しかし、必ずしもすべての認識がより先なる認識に依拠しているわけではない。さもなければ無限遡行が生じてしまうからである。そこでこの不都合を避けるために、アリストテレスは、「すべての認識」ではなく、「[知的な認識にかかわる]すべての教えとすべての学び」は、先在する何らかの認識から生じると述べたのであるという。

『分析論後書注解』第二講は、上記の一節に続く箇所(71a11-a24)において、アリストテレスが、いうところの先在的な認識について、それがどのようなものであるかということ論じた箇所を扱っている。

そこにいう何らかの認識の先在は、数学的な知識の場合に限らず、他の学問的・技術的知識についても同様に認められるし、論証的知識の範囲を越えて、ディアレクティケーやレートリケーの場合にも認められるところから、いわば帰納的に得られる結論でもあった³。そのかぎ

りに、アリストテレスのいう「すべての教えとすべての学び」は、必ずしも確実な知識としての学的認識に限らず、より広範な認識をも包括していた。

しかしトマスによれば、アリストテレスはこれに限定を加えて、知性による認識が成立する場合に限っている。言い換えれば、感覚的な認識はさしあたり考慮の外に置いているのであって、感覚や想像による認識を理性的な認識と同列に論じているわけではなかった。トマスによる『分析論後書注解』第二講は、あらかじめ第一講においてこの点を明らかにした上で、考察を進めているのである。

2. 「先なる認識」をめぐる二つの問題

さて『分析論後書注解』第二講においてトマスが取り上げるのは、アリストテレスが「すべての学びは先在する認識から生じる」というとき、そこにいう「先なる認識」とは何かということである。

ヴェネチアのヤコブはこの箇所(71a11)を「先なる認識は二つの意味で必要である」と訳している。この一節をめぐって、トマスは、アリストテレスのいう「認識の先在」には次の二つの問題が含まれていると指摘する⁴。

問題の一つは、いわば未知のことがら(結論)に対する既知のことがら(前提)という二つの異なることがらの関係において、「知ろうとしている結論についての認識を得るために〔前提として〕必要な、先に認識していることがら(quantum ad illa quae oportet praecognoscere ut habeatur cognitio conclusionis, cuius scientia quaeritur.)」として先在する認識とは何かという仕方問われる。

第二の問題として挙げられているのは、いわば同一のことがら(結論)に関する認識の度合いの

先に認識されている。帰納の場合には感覚によって認識された個別的なことがらの先在が前提されているのである(Nam in syllogismo accipitur cognitio alicuius universalis conclusi ab aliis universalibus notis. In inductione autem concluditur universale ex singularibus, quae sunt manifesta quantum ad sensum)。なお、レートリケーの場合には、エンテュメーマまたはパラダイグマを用いた説得が行われるけれども、前者は省略を伴う推論、後者は不完全な帰納として、やはり何らかの認識が先在しているとされる(n.12)

⁴n.13.(Marietti)

²水田英実『分析論後書注解』におけるトマス・アクィナスの知識論—*Expositio Libri Posteriorum*, lib.1, lect.1による, 『比較論理学研究』第2号(2004), pp.1-8.

³トマスの注解によれば、ディアレクティケーの場合に、推論と帰納が用いられるけれども、いずれの方法を用いる場合にも、結論として得られる普遍的な認識に先行する何らかの認識が前提されている(manifestat idem in orationibus disputativis sive dialecticis, quae utuntur syllogismo et inductione: in quorum utroque proceditur ex aliquo praecognito.)。推論の場合には別の普遍的なことがらが

違いに着目して、「結論そのものの先なる認識のあり方 (modus praecognitionis ipsius conclusionis)」が問われるということである。

これら二つの問題のうち、第二の問題は『分析論後書注解』第三講においても引き続き扱われる。そこではアリストテレスのテキストにおいて、「帰納や推論が行われる以前に、ある意味では〔結論について既に〕何か知っているけれども、別の意味では〔つまり現実的には〕知らないと言うことができるであろう。(71a24.)⁵」と記された箇所が取り上げられている。

その箇所(71a29)には『メノン』において示されたプラトンの想起説⁶に対するアリストテレスの批判的言辭も見出される。この批判的言辭についての詳細は『注解』第三講に譲るけれども、トマスによれば、さしあたり想起説によって解決が試みられたのは、ある一つのことからについて同時に、知っているということと知らないということは両立しないということから生じる難問であった。

つまり、いま知らないことはこれからも知らないままであるから、そこに知識が成立する余地はない。しかし反対に、いま知っていることはもとから知っていると言わなければならない。そこに知らないことを知るという過程を経ることのない知り方が存している。そこでこの知り方を見出したことによって、知識の成立を説明する方策として、想起説を提唱することができたのであるという。これに対してアリストテレスは、ある意味では知っているけれども、ある意味では知らないという知り方を容認する。この知り方を導入することによって想起説によらない問題解決を図ったのであるという。

ともあれ『分析論後書注解』第二講において、トマスは知性による認識が成立するために必要な「先なる認識」について考察を進めるにあたって、まず以上のような二つの問題があることを指摘している。それに応じて、いうところの「先なる認識」が必要とされる理由も二種類

あるとしたのである。

上述のように、トマスの『注解』によれば、アリストテレスのいう「先なる認識」とは、一つには、上記の第二の問題に対応する、知識探求における結論そのものについての「先なる認識」であった。これはアリストテレスによって容認された、ある意味では知っているけれども現実にはまだ知らないと言われる何らかの知である。

しかしま一つには、上記の第一の問題に対応することがらとして、いうところの「先なる認識」は、結論が知られるに先立って、結論そのものとは別に、前提としてあらかじめ知られていなければならないとされる何かである。

3. 認識そのものとしての「先なる認識」

『分析論後書注解』第二講においてトマスはこのような二様の「先なる認識」が存することに触れたあと、上述の第一の問題点から見て、先なる認識 (praecognitio) はどのようなものであるかということを取り上げ、それが認識そのもの (ipsa cognitio) としてのあり方に加えて、認識の順序 (cognitionis ordo) に関することがらを含意したものであることを指摘している⁷。このように注釈する根拠は、言うまでもなくアリストテレス自身のテキストが、この区別に応じて、まず認識そのものとしての「先なる認識」について論じた(71a11)あとに、認識の順序という点からの叙述(71a17)を続けているところにあった。

さてトマスの『注解』によれば、認識そのものとしての側面から「先なる認識」に関する考察を始めるに際して、あらかじめ了解しておかなければならないことが二つあった⁸。

(1) 論証によって知識の探求がなされたときに、何らかの結論が知られることになるけれども、その場合に、〔命題のかたちをとって表示される〕結論において、何らかの基体〔を表示する名前によってあらわされる主語〕に、しかるべき属性〔を表示する名前によってあらわされる述語〕が述語づけられる。

(2) その〔命題のかたちをとって表示される〕結論は、何らかの〔基本的な命題として前提され

⁵ヤコブ訳：Antequam sit inducere aut accipere syllogismum, quodammodo fortasse dicendum est scire, modo autem alio non.

⁶Platon, *Meno*, 80e.

⁷n.13.(Marietti)

⁸n.14.(Marietti)

る)原理から、〔演繹的に〕推論される。

ここからトマスは次の二つのことを引き出している。

(1) 単純なことがらについての認識は、複合されたことがらについての認識に先立つものであるから、〔主語と述語の複合によって表示される〕結論についての認識を得るよりも前に、〔主語として表示される〕基体と〔述語として表示される〕属性が、何らかの仕方では認識されている。

(2) 同様に、〔基本的な命題として前提される〕原理の認識にもとづいて結論が明らかにされるのであるから、原理が先に認識された上で、結論が原理から〔演繹的に〕推論されることになる。

このようにして、トマスは、論証的知識の場合、結論として何らかの知識を得るためには「先なる認識」として、具体的に、原理(基本命題)と基体(主語・実体)と属性(述語・付帯性)という三つのことがらが前提として存在していなければならないという見解を表明する。その上で、これら三つのことがらについては先在の仕方が二つあることを指摘している。

それは一つには、〈存在するか〉という点での先在であり、いま一つには、それが〈何であるか〉という点での先在であった。トマスによれば、これらの二つの点から上記の三つのことがらのそれぞれについて先在の仕方を吟味するとき、次のような相違を見出すことができるのである⁹。

まず原理(基本命題)については、これを〈何であるか〉という点からみるときは、「先なる認識」であることはできないとされる。それは、複合的なもの(たとえば「白い人間」)について、それ自体として何であるかと問うてみれば明らかのように、複合された要素のいずれであるとも答えることができないことによる。

白い人間は、白くあるとともに人間であるけれども、白さと人間の本質が異なるかぎり、「白さでない人間」と「人間でない白さ」の複合体は、人間でない人間、白さでない白さという矛盾を含んでいると言わなければならないから、

⁹n.15.(Marietti)

それが何であるかということを手端的に規定しようとするに矛盾に陥らざるをえない。そのかぎりにおいて、複合的なものは定義できないと言わなければならないからである。

「白い人間」の例はアリストテレスが『形而上学』第七巻において用いたものである¹⁰。トマスはこの例を引くことによって、複合的なものであるかぎり、「いかなる言明にも定義はない」ことを導出している。そこから、「原理(基本命題)は一種の言明であるから、〈何であるか〉という点では「先なる認識」でありえないとしたのである。しかし、〈存在するか〉という点においては、それ〔基本命題としての原理において言明される、何々であるということ〕が「(真で)ある」ということが、先に認識されうるといふ。

これに対して属性(附帯性)については、〈何であるか〉という点でのみ先なる仕方では認識されるという。反対に〈存在するか〉という点では、属性(附帯性)に関する「先なる認識」が想定されることはない。属性(附帯性)についてこのような見解が表明される根拠は、原理(基本命題)の場合と同様に、『形而上学』第七巻の同じ箇所にある。その箇所で、アリストテレスは「付帯性もある意味で定義を有している」と述べているのである。この点について、『形而上学注解』の該当箇所において、トマスは次のように説明している。

定義を有するのは実体だけである。しかし、より先なる手端的な意味で定義は実体のものであるけれども、より後なる何らかの意味において附帯性の定義もありうる¹¹。

さて『注解』においてトマスは、第三に、基体(実体)に関する「先なる認識」のあり方について次のようにいう。

基体(実体)は定義を有する。また、属性に依存しない存在を有している。基体(実体)が存在することは、附帯性が基体に内在することよりも先に認識されている。したがって、基体(実体)については、〈何であるか〉という点においても、〈存在するか〉という点において

¹⁰Aristoteles, *Metaphysica*, Thomas Aq., *In Met.*,

¹¹Thomas Aq., *In Met.*, lib.7, lect.4, n.1355

も、先なる仕方認識されていなければならない。それは特に、論証の媒辞は基体と属性の定義から得られるという理由による¹²。

ここで示された「実体」については、「〈何であるか〉」という点においても、「〈存在するか〉」という点においても、先なる仕方認識されていなければならない」という見解は、トマスが『デ・エンテ』において、知性による最初の認識に言及したときに表明したことでもある。ここでは、知性による最初の認識は、まさに〈存在する〉という意味においても、〈何である〉という意味においても、先なる仕方認識されることがらであると言われているからである¹³。

4. 〈存在するか〉と〈何であるか〉

トマスの『注解』によれば、アリストテレスは以上のことにもとづいて、「先なる認識は二つの意味で必要である」と述べたのである。すなわちアリストテレスが「先なる認識は二つの意味で必要である」とした理由は、「われわれが先なる認識を有する場合に、先なる仕方認識されることがらには、〈存在する〉という意味におけるそれと〈何である〉という意味におけるそれとの二つがあるからである¹⁴」という。

『分析論後書』第一巻第一章の該当箇所(71a11-17)を引用しておこう。

先なる認識には二つの意味がある。(1) あることがらについては、そういうことがある〔ということが真である〕という確信が先行していることが必要であり、(2) あることがらについては、そのように言われることがらそのものが何であるかということ(知性によって)先に知ることが必要だからである。なお、(3) あることがらについてはこれらの両方とも必要である。

例を挙げれば、一つには(1)「すべてのものは肯定されるか否定されるかいずれかである」ということは真である〔という排中律〕が〔真で〕ある〔と考えることを意味するような先なる認識〕であり、また(2)「三角形」と言われるものについて、まさにそれが意味しているもの〔を

知るという意味での先なる認識〕がある。しかし(3)「一」の場合には、それが何を意味しているかということ、それが存在しているかということの両方〔を意味するような先なる認識〕だからである。われわれにとってこれらのどれも同様の仕方知られるというわけではない。

さてトマスの『注解』においても、引用文中の(1)については、アリストテレスが例として挙げる排中律が、この意味での「先なる認識」として例示される¹⁵。次いで、(2)については、「そのように言われることがらそのもの」とは「名前によって表示されるもの」にほかならないから、名前の意味することが先に理解されていることが必要であるとした上で、「属性」passionesに関する「先なる認識」がこれに該当するという。ただし、アリストテレスのテキストにおいても、ヤコブ訳においても、この箇所「属性」という表現は見当たらない¹⁶。

もっとも前節で触れたように、トマス自身は、論証的知識の場合に、属性(附帯性)に関する「先なる認識」に関しては、〈何であるか〉という点でのみ先なる認識が存していると結論づけていた。ここではさらに、〈何であるか〉という点での「先なる認識」について、アリストテレスが〈端的に何であるか〉ということではなく、〈そのように言われることがらは何であるか〉という限定を加えて論じていることに着目し、その理由を次のように説明している¹⁷。

あるものについて、それが存在するかということが知られる以前には、そのものについて、本来的な意味で、何であるかということを知ることにはできない。存在しないものの定義は存在しないからである。従って、〈存在するか〉という問いは、〈何であるか〉という問いよりも先なるものである。しかしあるものについては、その名前によって表示されているものが何であるかということが、知性に先に知られていたのだから、そもそもそのものが存在するかということを明らかにすることができなかったのである。

そこでトマスによれば、アリストテレスが『形

¹²n.15.(Marietti)

¹³Thomas Aq., *De ente*, c.1: ens autem et essentia sunt quae primo intellectu concipiuntur

¹⁴n.16.(Marietti)

¹⁵n.16.(Marietti)

¹⁶n.17.(Marietti)

¹⁷n.17.(Marietti)

而上学』第六巻において、排中律のような基本的な命題を否定するひとを相手に討論をするときには、最初に、命題を構成する名辞の意味を明らかにすることから始めなければならないと教えているのもこの理由によるという¹⁸。

さらにアリストテレスが『分析論後書』のこの箇所では三角形の例を挙げているのも、三角形と言われることがらそのものを、三角形という名前の意味することがらとして先に知ることが必要であることを説明するためであったという。三角形という名前が何を意味するかということが先に知られて初めて、何らかの図形としての三角形について〈何であるか〉を規定する定義が理解されることになるからである。

ところで、図形の下位概念としての三角形は、正三角形に対しては上位概念である。このような相対化が可能であることについて、『注解』では「あるものに対して附带的であるものが、他のものに対しては基体となるということがあっても不都合はない。たとえば、表面は物的実体に附帯している。しかし表面は色にとって最近位の基体である。これに対して、何ものに対しても附带的であることのないような基体が、実体にほかならない¹⁹」という説明が加えられている。

トマスの『注解』によれば、そこからさらに、第一哲学 (*philosophia prima*) に該当することとして、ある種の学的認識は、いかなる意味においても属性(附帯性)となることのない基体(実体)に関して成り立つとされる。しかし、自然学 (*scientia naturalis*) の場合には、その学的認識は、実体そのものではなく、可変的なものという限定が加えられた基体に関して成り立つ。

いっぽう、何らかの附帯性を対象とする場合には、何らかの属性に対する基体として受け取られたものが、より先なる基体に対する属性として捉えなおされることに支障はないとされる。むしろこのような基体と属性の系列は無限に遡行することはできない。その学的知識における何らかの第一のもの、すなわちいかなる意

味においても属性として受け取られることのない基体に行き着くからである。

このような分類を行った上で、ここでアリストテレスが挙げる三角形の例は、属性とも基体ともなりうることがらに関して成立する認識を説明するためのものであって、属性となることのない基体に行き着くものではなく、あくまでも属性に関する学的認識の一例として挙げられているとする。

先の引用文中の(3)について、トマスは『注解』の中で次のように説明している。

同じ箇所ではアリストテレスはさらに、ある場合には〈ある〉ということと〈何である〉ということとを両方とも先に知る必要があると述べている。その例として、すべての量の範疇の根源である一を挙げる。それは、たとえ何らかの仕方でもこの一が実体に対する附帯性であったにしても、量の範疇においては一より先なるものは存在しないのであるから、量に関わる数学的学問において、〔一は〕基体として理解されるのであって、属性として理解されることはありえない²⁰。

以上のように、トマスによれば、〈存在するか〉と〈何であるか〉という二つの観点からみて、認識そのものとしての「先なる認識」について、アリストテレスは三つの場合がありうるとしたのである。すなわち原理と属性と基体は、それぞれにとっての「先なる認識」のあり方を異にしているということを示したのである²¹。この点について、トマスはさらに次のように注記している。

〔先なる認識のあり方が異なるのは〕それぞれの場合における認識の成立根拠が同じでないからである。原理は、結合分離を行う作用によって認識される。しかし基体と属性は何であるかを把握する作用によって認識される。ただし基体と属性の場合では異なる仕方でも認識される。基体は無条件的に定義される。それは基体の定義には、基体の本質の外にあるものは何も指定されないからである。

他方、属性は基体に対する依存性を伴う仕方でも定義される。〔属性の定義には、属性の本質

¹⁸ Aritoteles, *Metaphysica*, lib.6, c.4; cf. Thomas Aq., *In Met.*, lib.6, lect.7

¹⁹ n.17.(Marietti)

²⁰ n.18.(Marietti)

²¹ n.19.(Marietti)

の外にある基体が指定されると言わなければならない。) これらはみな同じ仕方で認識されるわけではないのである。したがってこれら三つの場合に「先なる認識」のあり方が異なっているとしても、何ら不思議ではない²²。

5. 認識の順序からみた「先なる認識」

さて、トマスの『注解』によれば、アリストテレスは次に、認識の順序という点から「先なる認識」について考察を進めている。該当箇所(71a17-a24)においてアリストテレスは次のように論じている。

あることごとらについては〔何らかの仕方で〕先に認識していることを認識することになる。しかしある場合には、〔前提となることごとらと〕同時にそのものについて知を得ることになる。普遍的なことごとらと下属する個々のことごとらについて〔同時に〕認識を得る場合がそれである。

たとえばある人が、すべての三角形は〔内角の和として〕二直角に等しい角を持つということを知っていた場合、半円に内接するこの図形について〔内角の和として二直角に等しい角を持つという〕まさにそのことを認識するにいたったときに、同時にこの図形が三角形であるということも認識する。

またある場合にはこの仕方で学的認識が得られる。個的なものとして存在していて、いかなる他の基体にも述語づけられない〔終局の〕ものを認識する場合がそうである。終局にあるものが中間にあるものによって認識されることはないからである。

ところでアリストテレスのいう「先なる認識」は、認識の順序を含意している。このことは『注解』において既に指摘されている²³。ここではさらにその順序について「何かか他に先立つということは、時間的な意味においても本性的な意味においても考えられる」として、次のように続けているのである。

ここで「先なる認識」における二つの順序について考察しなければならない。すなわち、あるもの(A1)は時間的に先なる仕方で知られるものとして先に認識される。アリストテレスによれば、この場合、あるひとがあるもの(B1)を

認識することになるのは、〔そのひとがそのもの(B1)を知るために必要な何かとして〕先に認識されると言われるそのことごとら(A1)を、そのもの(B1)〔を認識する〕よりも時間的に先に認識しているのである。

しかしあるもの(A2)は、時間的には同時に、しかし本性的に先なる仕方で認識される。アリストテレスによれば、この場合、先なる仕方で認識されるもの(A2)と、そのために先に認識されるもの(B2)について、時間的に同時に知を得ることになる²⁴。

トマスの『注解』によれば、アリストテレスはここで「先なる認識」が含意する認識の順序についてさらに考察を進め、普遍とそれに含まれるものという観点から論じているのである。というのも、あることごとらが認識されるために、前提として何らかの「先なる認識」が存在していなければならない。むろん必ずしも時間的な意味で「先なる認識」が成立していなければならないというわけではない。上述のように、時間的には同時であっても、本性的に先なる仕方で成立する場合があるからである。

そこで、時間的であるか否かにかかわらず、学的な認識が成立するための要件として何らかの普遍的なことごとらについての認識が「先なる認識」として前提されることが明らかにされる。そのために普遍的なことごとらについての認識と普遍的なことごとらに下属する個々のことごとらについての認識の間に存する順序について、次に述べるような例を用いて考察を進めている。

〔三段論法によって〕結論を引き出すために、二つの命題すなわち大前提と小前提が必要であるから、大前提となる命題を知っているだけであれば、そのときにはまだ結論の認識は得られていない。したがって大前提は、本性的な意味においてのみならず時間的な意味においても、結論よりも先に認識されていることになる。

また〔大前提となる命題と小前提となる命題を両方とも知っている場合であっても〕大前提となる普遍的な命題の中に含まれている何かか、必ずしも普遍的な仕方でその命題の中に含まれていることが明らかにされないまま、小前提の中に持ち込まれたり、取り込まれたりした場合

²² *ibid.*

²³ 第3節参照。

²⁴ n.20. (Marietti)

には、小前提が真であることはまだ確実になっていないであろうから、そのときにはまだ結論の認識は得られていない。

しかし小前提の中に取り込まれた名辞が、大前提となる命題において普遍的な仕方含まれていることが明らかである場合には、普遍的な仕方理解されたものの中にその認識があることになるから、小前提が真であることは明らかである。そしてこの場合には結論の認識も直ちに得られることになる。

たとえば、あるひとが「すべての三角形は二直角に等しい三つの内角を持つ」という〔一般的な〕大前提のもとで論証をする場合、この前提の認識を得ただけでは、まだ結論の認識は得られていない。しかしこのあとに、〔小前提として〕「半円に内接するように描かれたこの図形は三角形である」ということを導入できたならば、そのひとは直ちに〔結論として〕「この図形は二直角に等しい三つの内角を持つ」ということを知るにいたる。

しかしもし「半円に内接するこの図形は三角形である」ということが明らかでなければ、前提を導入しても、〔「この図形は二直角に等しい三つの内角を持つ」という〕結論を知るまでにいたらない。むしろ〔「半円に内接する」この図形は三角形である〕ことを証明するために必要な別の媒概念を求めなければならない。

6. おわりに

トマスの『注解』によれば、「先なる認識」が含意するこの順序は、既知のことから（普遍的なもの）を前提として、未知のことから（個別のことから）についての認識を得るという順序でもあった²⁵。しかしながら、「先なる認識」のあり方については、普遍的なものが先に知られると言われるだけではなかった。概念形成（単純把握）と判断（概念の結合分離）が異なる認識作用として区別されるのに応じて、「先なる認識」のあり方がいくつかの場合に分けて論じられている。自明な命題が第一に前提されるという場合のほかに、〈何であるか〉の認識の場合のように、名前の意味するところは何であるかということが最初に認識されていなければならないとも言われたのである。

²⁵n.21.(Marietti)

始めに指摘した通り²⁶、想起説の批判を伴う議論は第三講に譲られている。しかし『分析論後書注解』第二講においてトマスが行った「先なる認識」に関するこのような考察を通して、その知識論が体系的著作に反映されていることに気づかされる。じっさいトマスが『神学大全』第一部において、最初に神の存在論証を試みた際にも、〈何であるか〉ではなく、名前の意味するところは何であるかということを論証の媒辞とすることができたのである²⁷。

主要文献

Aristoteles. *Analytica Priora et Posteriora*, recensuit brevis adnotatione critica instruxit W.D.Ross, praefatione et appendice auxit L.Minio-Paluello. Oxford, 1964(1982)

Barnes, Jonathan. *Posterior Analytics*, (in *The Complete Works of Aristotle*, The Revised Oxford Translation Edited by Jonathan Barnes, Vol.1) Oxford, 1984.

Larcher, F.R. *Commentary on the Posterior Analytics of Aristotle by St.Thomas Aquinas*. Magi Books, 1970.

Minio-Paluello, L. and Dod, B.G. *Analytica Posteriora, Translationes Iacobi, Anonymi sive 'Ioannis', Gerardi et Recensio Guillelmi de Moerbeke*, (in *Aristoteles Latinus*, IV, 1-4) Desclée de Brouwer, 1968.

Thomas Aquinas. *In Aristotelis Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio*, cum textu ex recensione Leonina cura et studio Raymundi M. Spiazzi. Marietti, 1964.

Thomas Aquinas. *In Libros Posteriorum Analyticorum Expositio*, (in *Sancti Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Opera Omnia iussu impensa Leonis XIII P.M. edita*, Tomus I) Roma, 1882.

Thomas Aquinas. *In Duodecim Libros Metaphysicorum Aristotelis Expositio*. Editio iam a M.-R. Cathala exarata retractatur cura et studio Raymundi M. Spiazzi. Marietti, 1964.

Thomas Aquinas. *Summa theologiae*, cura et studio Petri Caramello cum textu ex recensione Leonina, Pars Prima et Prima Secundae. Marietti, 1952.

Torrell, Jean-Pierre. *Initiation à saint Thomas d'Aquin, Sa personne et son œuvre*, Fribourg, 1993.

Weisheipl, James A. *Friar Thomas d'Aquino, His Life, Thought, and Works*. Oxford, 1974.

(みずた ひでみ, 広島大学 [哲学])

²⁶第1節参照。

²⁷Thomas Aq., *Summa theologiae*, I,q.2,a.2, ad 2: Nomina autem Dei imponuntur ab effectibus, ut postea (q.13, a.1) ostendatur, unde, demonstrando Deum esse per effectum, accipere possumus pro medio quid significet hoc nomen Deus.